

デーヴィッド・コッパーフールドまで

——ディケンズの精神的發展——

白 田 昭

はじめに

チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens) が、彼の大作として衆目の一致する「デーヴィッド・コッパーフールド」(David Copperfield) に於て、自伝の一部をその中に盛り込んだことはすでに有名な事実である。しかし彼は、それまで、自分の幼い頃の苦闘の歴史を胸の中に秘め、彼の妻にさえも、彼がその光景に下した幕を、上げて見せることをしなかったと云われている^①。およそディケンズの作品を読み、又彼の伝記に親しむ人にして、この幼時の一挿話が、如何に大きな影響をこの偉大な作家の生涯に残しているかということを感じ取らないものはないといえよう。かくも大きな自己形成の要因ともいべき事柄を、彼が自分の胸裡に秘して物語らなかったというこの理由は、理解に難くないが、何故「デーヴィッド・コッパーフールド」を書くにあたって、これを公にしたかは、非常に興味あることである。以下に述べる小論に於ては、「デーヴィッド・コッパーフールド」に於けるこの秘密の公表に到るディケンズの精神的發展を跡づける様に試みて見た。

デーヴィッド・コッパーフールドまで

まず第一に問題となるのは、ディケンズの少年期、青年期に於ける苦労が如何なるものであったかということである。このことはフォースター (Forster) による伝記に於て、唯一つマリア・ビードネル (Maria Beadnell) に対する失恋のエピソードを除いては、完全に語られて居り、最早此処に於て、再び述べる必要もない程に知られているものであるが、一応その概略を記しておくことにする。チャールズ・ディケンズは一八一二年に生れた。父ジョン・ディケンズ (John Dickens) は、海軍の下級官吏であつて、ポートシー (Portsea)、チャタム (Chatham) 等で勤務していた。そして、チャールズが八歳頃に、彼の一家はチャタムを引き払い、ロンドンに居を移した。このロンドン移住までが、チャールズの幼時に於ける、最も幸福な時期であつたが、ロンドンに移つたディケンズ一家は、やがて経済的不如意におそわれ、それが昂じて遂には父ジョン・ディケンズは借金のため、マーシャルシー (Marshalsea) に留置されることとなつた。これより少し前チャールズは、親類のジェイムズ・ラマート (James Lamert) なる人の世話によつて、ワーレン靴墨工場 (Warren's Blacking) に職工として働くこととなる。そして監

獄に居る父母のもとを離れて一人で下宿し、不十分な給料で、日々餓しい思いをしつつ、この苦役の生活を送ることとなる。幸いにして、この苦しい生活も長くは続かず、半年足らずで、父はマーシャルシーから釈放され、やがてチャールズも、彼の牢獄である靴墨工場より解放される。そして暫らく学校へ通った後、始めは法律事務所の見習、次には新聞記者となり、やがては作家として立身して行く。この作家となる前、未だ駆け出しの新聞記者時代に、ビードネルなる銀行家の娘、マリアに恋をする。このマリアは「デーヴィッド・コッパフィールド」のドラ(Dora)である。しかしデーヴィッドとドラの物語は、甘い牧歌的な、成就された初恋の物語であるが、このマリア・ビードネルに対するディケンズの恋は報われなかった。銀行家である父親が、才気はあると見えても、未だ海のものとも山のものとも判らぬ一介の新聞記者に、自分の娘を呉れてやる気が起らないのも又当然であって、結局ディケンズは、社会的身分の裏付のないためにこの恋に敗れ去ってしまうのである。

ところで、ディケンズの靴墨工場での生活は、フォースターに渡された自叙伝の断片に詳しく語られ、そのより圧縮された形で殆ど変る所なく「デーヴィッド・コッパフィールド」の中に述べられている。それに反して、このマリア・ビードネルとの恋物語は、自叙伝断片には語られず、フォースターの伝記の中では極く簡単に言及されているだけで、「デーヴィッド・コッパフィールド」の中では、ドラ・スペンロウ(Dora Spellow)とデーヴィッドの恋として、全く反対の形におきかえられている。「デーヴィッド・コッパフィールド」に於ては、ドラは主人公が見習として勤めている法律事務所の主人スペンロウの一人娘であった。

そしてデーヴィッドがスペンロウ家へ招かれ、ドラに会い、一目で彼女に魅せられてしまう。しかし二人の間にやつと通った思いも、やがては父親スペンロウ氏の知る所となって、デーヴィッドはドラとの間を割かれるが、まことに都合なことには、その直後にスペンロウ氏は急死し、ドラとデーヴィッドの共通の友人としてその仲を取りもったジュリア・ミルズ(Julia Mills)という女性の尽力で二人の仲は結ばれる。ところでエドガー・ジョンソン(Edgar Johnson)の近著、「チャールズ・ディケンズ——その悲劇と勝利——」(Charles Dickens, His Tragedy and Triumph)に於ては、ディケンズとマリア・ビードネルの間の恋のいきさつが詳しく述べられているが、それによると、恋人の父ビードネル氏はディケンズの恋の危機にあたつて、まことに頑健に生き残り、二人の仲を割いて居る。そして実人生に於けるジュリア・ミルズの役を演じたマリアンヌ・リー(Marianne Leigh)は、ジュリアとは正反対にディケンズとマリア・ビードネルの二人を助ける所か、二人の間に立つてその関係をもつれさす以上に何の役にも立っていないのである。そして又「デーヴィッド・コッパフィールド」に於て、デーヴィッドがドラと始めて相見るのは、ドラがフランス外遊から無事帰国したお祝のパーティに於てであったのに対し、実際に於ては、ビードネル氏はディケンズから自分の娘を離すために、彼女をフランスへ送っている。

さてこの二つの事件、即ちマーシャルシーの留置所とワーレン靴墨工場での生活、及びマリア・ビードネルとの初恋の破滅は、ディケンズの性格、又以後の生活を決定づける因子となつたのであった。幼時に父に連れられて散歩に出たディケンズは、フォールスタッフ(Falstaff)の

連想に有名なガッツ・ヒル (Gads Hill) の上にある邸を、「もしお前が忍耐よく、一生懸命に働けば、いつかはあそこに住める様になるだろう。」という父の言葉に耳を傾け、驚異の眼を見張って眺めていたということは有名である。我々は、この少年の胸の中にどの様な想いがわきかえっていたかは知る由もないが、しかし後年の彼の回想などから見て、彼は自分の位置は、今後の立身出世に充分なものであって、その成否は自分の努力次第にかかっていると考え、将来の立身 pensando 幼い夢を楽しんでいた様に想像出来る。こう云った少年らしい、ウィティントン (Whittington) の物語を思わせる様な夢を実現しようとして、チェスタートン (Chesteron) の言葉を借りて云えば、「今正に飛板を蹴って離れんとした」時に、その飛込台は、父親の留置と自分が工場で働くという事実によって、彼の足許から崩壊し去り、彼は「大きくなって学問のある偉い人になるという幼い希望が、胸の中に押しつぶされるのを感じた」のであった。

フォースターが記している断片的自叙伝を、或いは、「デーヴィッド・コッパフィールド」のマードストーン・グリンビー商会 (Murdstone and Grinby) のくだりを読めば、人はディケンズの靴墨工場でのこの苦役が少くとも一年乃至は二年は続いたという様に考え勝ちである。しかしエドガー・ジョンソンの研究によれば、それは長くて五ヶ月恐らく四ヶ月を超えていないであろうとのことである。^⑤ 成程マードストーン・グリンビー商会に於ける生活も、又フォースターによるディケンズのワーレン靴墨工場に於ける生活も、共に大人の目から冷静に考えて見れば、それ程大騒ぎする程のものでもなく、又ディケンズの如く、後年自分の野心を

デーヴィッド・コッパフィールドまで

充分に果した人間からすれば、自己満足の源とこそなれ、決して厭な思ひ出となる様なものではないかの様に思われる。しかし問題はその苦しい生活の長短とか、その苦しさの度合にあるのではなく、少年が一心に胸に暖めて来た、彼にとって唯一の存在理由とも云うべき未来の希望が、自分の手によってではなく、他人しかも自分の父の不行跡のためにあつてなく打ちくずされてしまったという所にある。そしてその上、癒し難い痛手を受け、心に血を流す子供の気持をよそに、彼の父はマーシャルシーに連行される時、花道に見栄を切る千両役者よろしく、「我が上に太陽は永遠に没したり。」と云う。ところが太陽の消え去った筈の御当人はマーシャルシーで結構牢屋生活を享樂して居たのであった。本当に太陽の永遠に没したのは、ひもじい腹をかかえてロンドンの町をさすらい歩いた少年チャールズ・ディケンズの上にてあって、ディケンズが後年この父の言葉が、「その当時、私の心を本当に打ち砕いた様にした。」と述懐しているのも、無理のない所と思われる。こういったディケンズの心理を説明して、チェスタートンは次の様に云う。

「ディケンズはドリットやネルの様な形の、まるで聖人の様な子供ではなかった。……決して不名誉な意味ではないが、又はつきりとした意味に於て、彼は幼時に於ては、俗世的であつたと云えよう。……彼にとって一番堪え難い時期は、工場でいぢめられたときや、街で餓えていたときには、やって来なかった。それは姉のファニーが王立音楽院で賞をうけるのを見に行ったときにやって来た。……そこには唯目的を齟齬された狂った様な意識、檻に入れられた野獣の様な心的態度があるばかりである。」^⑥

しかしやがてディケンズは人生入門のこの苦勞から解放される。この一時期は、実に人類にとって幸運なものであったといえよう。もしこれがより短かければ、恐らくはこの時期のディケンズにあたえた印象ももう少しのものであったであろうし、これより長かった場合には、彼の心にあった不屈の魂も、その重圧に遂に崩れ去ったであろう。実にこの一時期は、ディケンズの中の良いものを傷つけず、むしろそれを確固としたものにするに、最も適当な期間だけ続いたものと云える。そしてワーレン靴墨工場の汚い仕事場で喘ぎ、空腹を抱えてロンドンを彷徨した、「繊細で、肉体的にも精神的にもすぐに傷つけられる」少年は、二度と貧困の犠牲となるまいとして、「鉄の如き規律の下に、強烈と云える程に強固な意志を以て、目的と自己の間に何の障害の介在することも許すまいと決心した男と生れ変わった」のであった。

さて次に来るものはディケンズが十八歳の時におこった、マリア・ビードネルとの初恋であった。この事件の詳細は、エドガー・ジョンソンの著に詳述されているので、ここでは省くことにするが、要するに、この恋は、富裕な銀行家の末娘と、貧しい一介の新聞記者との間の恋であり、しかも女の方が男よりも一年ばかり年上で、男の方は十八歳になったかならずという様な条件の下に於て、容易に想像される様に、結局は女の父親にその仲を割かれ、女の方も、若者の熱烈さに比して決して本気であつたとも思えず、最後には、女の方から見捨てられるという結果となつた。このことも世上に於ては、殆ど日常茶飯事に属するものであつて、どここの横丁にも起り得ることなのであつた。しかしディケンズに於ては事ありふれたものと云え、その彼に及した影響は決定的なもの

であつた。フォースターの述べる伝記に於ても知られる様に、ディケンズはすでに幼い時より、自ら紳士を以て恃して居た。あのワーレン靴墨工場に於ける苦しみの大きな部分を占めたものは、この小さな紳士の傷つけられた自尊心の苦しみであつたと云つて過言ではないだろう。十歳にも満たぬ頃にうけた傷が、後年何万という読者から次の小説を文字通り渴望され、その喝采を恣にし、経済的にも何等不満のない身分になつて、少くとも世俗的な意味に於て、殆ど人間の野心のすべてを全うしたとも云える壮年の男に、手のつけられぬ不安を与えるといったことは、常人の想像以上のことである。すこし前に述べたことではあるが、ワーレン靴墨工場時代の苦しみは、そのみ單獨で存していたならば、容易に忘れ去られる事も可能であり、ディケンズの如き晩年を持った人間にとっては、よしんばそれが想起されたにしても、それはほほえましい自己憐憫の対象であり、又多くの場合自己満足の対象となるものである。しかるにディケンズの場合はそうではなかつた。ディケンズ自身には、そうは思えなかつたとしても、客觀的にはその影響が浮動的であつて、決定的な確固たる性質のものではなかつたワーレン靴墨工場とマーンシャルシーの出来事を決定的なものとして、彼の心に消し難い線をきざみ込んだものは、それはマリア・ビードネルとの恋愛であつた。ワーレン靴墨工場の出来事が、丁度今や飛躍せんとする少年の夢を無慘にも打ち砕いた様に、マリア・ビードネルの事件は、打ち破られた夢の中から雄々しく歩一步と身を擡げ、段一段と目的に近づき、今や人生の闘技場に入らんとする青年の自尊心を打ち挫いたのであつた。ディケンズは、ここに於て再び貧しさの故に自分の進む道を塞がれ、その自尊心を傷つけら

れたのであった。この傷つけられた自尊心の痛みが、彼の幼時のそれよりも更に大きいものであったことは、彼がフォースターに書き送った自叙伝の断片に於て、ワレン靴墨工場時代のことは述べながらも、遂にこの事件を叙するにあたって筆を折ったことよりしても知られ得る様に思える。

ディケンズの生涯は、外面の華やかさにも拘らず、今迄に述べて来たこの二つの事柄、即ち、ワレン靴墨工場とマーシャルシー及び、マリア・ビードネルに対する失恋の投げかける影の下を終始離れ得なかった。ディケンズは、後年今は人妻となった昔のマリアに出合つて当時の事を手紙で述懐し、その時のことが、「私にとっても深い印象を与えたので、今は私の持前になってはいるが、決して元来持つて生れたものではないと思つてゐる、抑制の習慣もそれに起因してゐる様に思います。そしてその習慣のために、自分の子供たちに対してさえ、とても小さい時でない限り、自分の愛情を示すのを、控え目にする様になった。」と云つてゐる様に、彼が世間に示した元氣満溢の生活の底には、何か彼の溢れ出る活氣の泉をかげらす孤独がひそんでいた。後年に於て殆ど肉体的苦痛とも云える精神の不安定の原因となった、このディケンズの生涯の暗黒の孤独の影は、ディケンズの心の中に、ドストエフスキー的と評しても遠くない闇の世界を将来した。そしてこの暗い影はワレン靴墨工場とマーシャルシーにその萌芽を發し、マリア・ビードネルの事件に於て決定づけられたと結論しても誤りでない様に思える。

やがて、「ボズのスケッチ」(Sketches by Boz)によつて、文壇にデビューしたディケンズは、次の「ピクウィック・クラブ」(Pickwick

デーヴィッド・コッパーフイールドまで

Papers)の評判によつて、一躍人気作家としての位置を不動なものとしたのであった。この十九世紀のドン・キホーテとも云われるサミュエル・ピクウィック (Samuel Pickwick) は、そのサンチョ・パンザなるサム・ウェラー (Sam Weller) と共に陽氣な遍歴をつづけ、至る所で、その罪のない失策から豊かな笑いかもし出して行く。ディケンズは当時愛した女性を妻として迎え、未だに新婚の香わしい幸福に酔つて居り、妻やその妹たちと共に、劇場を訪れなどして、華やかな夜をすごし、或いは又妻と二人で爐辺に静かな愛の夕べを送ったことであろう。恐らく、幼なかりしチャタムの日より始めて彼は幸福であつたとも云えるのであつて、あの靴墨工場や牢獄の悲惨は遠く去つた様に思われた。あの頃の苦しみも、「彼の心の生れつきの優しさを駄目にする程、長くは続かなかった。結局彼は運命の寵子であつたのだ。自分が苦しんだものは窮極に於て、彼を益するものとなった。そして二十四歳にして、その国、その時代が一番の人気作家になった男が、物事の陽氣な面を見、数知れぬ読者大衆と共に笑うことが出来たのも、無理からぬことであつた。」これはジョージ・ギッシング (George Gissing) の言葉であるが、こう云つた事を考え合わせるとき、我々がこの「ピクウィック・クラブ」の生命となる若々しい陽氣な笑いの流溢を理解するのも容易なことである。しかし、この様に陽氣な作品の中に於て、奇妙にとも云える程周囲の生氣と一致しない陰鬱な部分の存在するのを我々は見逃すことは出来ない。

エドガー・ジョンソンは、

「どの様に暗い危険なものをディケンズが超越しなければならなかつたかは、この本の梓の中にはめこまれた幾つかの短かな独立した

物語によって暗示される。……たしかにそれらは、「ピクウィック」三十二万五千語の中の極く僅かのものしか必要としないし、文学的価値に於ては無視し得るものかも知れないが、人の目をそばだたせることは、ディケンズが喜劇小説の明るい構成の中に、これら暗鬱な貧困、迫害、復讐、狂気、失望の物語を闖入させなければならなかったということである。その存在は、ディケンズの心の底に沈んだ悲しみと恐れを表わす一脈の病的恐怖を示している。^⑬

と説いているが、この事を示す最も著しい一例は、「老人の語る奇妙な訴訟依頼人の物語」(The Old Man's Tale about the Queer Client)なる一挿話である。ヘイリング (Heyling) なる名の一人の男が、借金のためにマールシャルシーに投獄される。しかし彼の父は莫大な財を持ちながらも、彼を救おうとせず、やがて牢外で苦しい生活を続けた彼の妻と子供は、彼を頼って牢内に入り、監房の冷い石の床の上で餓にさいなまれて死んで行く。最愛の妻子が自分の眼前で死ぬのを、なす術もなく傍観しなければならなかったヘイリングは、妻子を失った心痛のあまり熱病にかかるが、その床にあって彼は、富を持ちながら、自分の妻子を救うことを拒否した実父及び義父に対して復讐を誓う。やがて熱病より回復したときに、彼は実父が突然遺言なくして死に、その結果財産は憎まれていた彼の手にはからずも入ることになったのを聞く。牢より解放されたヘイリングは、誓った義父への復讐の機会をねらって、義父が書き交えの出来るといふ諒解の下に出した約束手形を多額のプレミアム附で買い取り、義父の破産をひきおこす様な時期に、その支払を要求する。そのため彼の義父は破産し、投獄を逃れるために姿を消すが、ヘイリン

グはなおもその追跡の手をゆるめず、ディケンズ幼時の苦闘の地であるキャムデン・タウン (Camden Town) のリトル・カレッジ街 (Little College Street) と呼ばれる陰惨な場所に彼を追いつめ、牢獄に送る決心なる事を告げる。その為この老人は発作を起して死に、ヘイリングは何処へともなく姿を消してしまう。これがこの物語の大体の要約であるが、この物語は、勿論「ピクウィック・クラブ」の本筋の物語——もしその様なものがあるとすれば——には全く何の關係もない唯埋草的に用いられたものにすぎない。しかしその様な埋草的性格のものである丈に、ディケンズがこの様に陰惨な復讐の物語を此処に用いなければならなかったということ自体が、ジョンソンの云う様に、彼の中には克服されない、唯表面から押し沈められたにすぎない病的な暗い面が存していたことを証するものである。ジョンソンは「ピクウィック・ペーパーズ」を論じて続けて云う。

「しかし、この現実派お伽話の主人公が若者の心を持ち、暗闇の力から逃れることが出来ても、彼はそれを打ち殺すことは出来ない。その闇の力は、陽光と抒情の世界の中に隠顕する。ピクウィック氏は、ジングル (Jingle) やトロッター (Trotter) の心に触れることは出来るが、ドッドスンとフォッグ (Dodson and Fogg) には触れることは出来ない。彼は彼自身ではフリート (Fleet) の牢獄から逃れることは出来ても、それを、そして又それが代表する悪を破壊することは出来ない。」^⑭

「ピクウィック・ペーパーズ」について、「オリヴァー・ツイスト」(Oliver Twist)、「ニコラス・ニッケルビー」(Nicholas Nickleby)、「骨

書店」(Old Curiosity Shop)、「バーナビー・ラッシュ」(Barnaby Rudge)と続く一連の彼の作品を読み、彼の無尽蔵とも思える創造力に感嘆し、又ピクウィック氏、サム・ウェラー、バンブル氏(Mr. Bumble)、ニックルビー夫人(Mrs. Nickleby)、マンタリーニ(Mantalin)、ディック・スウィヴェラー(Dick Swiveller)等の如き実に愉快な登場人物を楽しみ、オリヴァーや少女ネル(Little Nell)等の可憐な人物に同情するとき、そして又伝記を通じて、当時の彼の活気に満ちた生活を知るとき、我々はディケンズの心の中には何のくもりもなく、唯あるものは、溢れるばかりの幸福感或いは活力だけである様に想像し勝ちである。たしかにこの様な幸福感或いは活力と云ったものは、ディケンズの重要な或いは最大の要素であつて、チェスタートンも、そのディケンズ論に於てはディケンズのこの要素に最大の重点をおいている様に思える。しかし又我々はこの面のみを重視して、ディケンズのもう一つの暗い面を見逃す様な事があつてはならない。

ナンシー(Nancy)を殺害して、闇をつき静寂の中を逃走するサイクス(Sikes)は、恐怖が自分の身体にせまり来るのを感じ、彼の前のあらゆる事物は、現であれ幻であれ、静止しているものであれ動いているものであれ、何かしら恐しいものの形を取る。しかしこれらの恐怖も、彼の跡を追つて彼を苛むナンシーの血まみれの姿に比すれば物の数には入らない。彼はその影をくらやみの中に隈取り、その輪郭の詳細をその中に見ることが出来る。そして葉ずれの音にも彼女の衣ずれの音を聞き、吹き来る風も彼女の最後の低い叫びをのせて来る様にも思える。止つても走つてもそれは跡を追つて来る。遂に彼はその亡霊に苛まれていたた

デーヴィッド・コッパーフフィールドまで

まれず、何か他の刺激によつてそれを打ち消そうと試み、火事場へ飛び込み、物に憑かれた様に消火作業に加わる。しかし火事の狂った様な興奮の納つたとき彼の罪の意識は十倍の力を以て又彼に迫つて来る。こう云つたサイクスを追うカインの呪いとも云うべきもの、或いはやつとフエイギン(Fagin)の手より解放されて、メイリー夫人(Mrs. Maylie)の所に休養するオリヴァーを脅かすモンクス(Monks)とフエイギンの影、更に又暗い階段を忍び足で上つて来、夜人氣もない小屋に密議をこらすモンクス自身、これらのものこそディケンズの心の底にあつて彼を苛んだ暗黒の力を代表するものに違いなかつた。この様な例は「オリヴァー・ツイスト」に限らず他の作品にも見られるものであつて、「バーナビー・ラッジ」にあつては、その暗い影はラッジ母子を追いかける殺人犯ラッジに具現される。そしてこの場合も「オリヴァー・ツイスト」のモンクスと同じ様に、ラッジは小説の完結する迄殆ど光のある場所には姿を現わさない。それは常に真夜中の闇の中に蠢き、その姿もうすぐらい場所にひそむ影絵としてしか現れない。更に今度はディケンズの小説の筋の運ばれる場面となる場所に思いをめぐらせて見よう。「オリヴァー・ツイスト」の中のフエイギン、サイクス、モンクスの住い、或いはネルの祖父の骨董店、クイルプ(Quilp)の住居、この様な場所は多くの場合リアリティックな筆では書かれていない。それらは常に何かうす暗い煙かもやの如きものの漂つた湿っぽい所であつて、何か「魔女の銅釜からの蒸気」^⑩を思わせる様なものでミステイファイされている。この様にこれら暗黒の力を象徴するモンクスもラッジも、又それらの人物の住いもすべて現実的な描写を持たず、何か人を苦しめる悪夢に

も出て来る姿を取るといふのは、とりもなおさずディケンズの心の中の現実が、やはりこれらのものを悪夢の如き漠とした姿で呈していたのであって、これを現実主義的に客観的にはつきり描き出し得る程に、これらのものと自分との間に距離をおいて眺めることが出来なかったことを示すのであって、それらモンクス等の人物が、非現実的な、輪郭のはつきりしない人物であり、又その出現する場所も又そうであつたと同様に、それらの代表するものはディケンズの心の中にはつきりとしたアウトラインを持たず、過去の苦しみに対する漠とした恐怖という深い又暗く澀んだ淵をディケンズの心の中に形成していたのであつた。

「骨董店」の少女ネルの祖父は毎日賭場に通つて、一攫千金を夢見る。その動機を老人は自分の言葉で次の様に説明する。

「私は自分で大変な貧乏に耐えて来たから、あの娘には貧乏に伴つてやつて来る苦しみを免れさせてやりたい。私の大事な子供だったあの娘の母親を若死させた惨めさを、私はあの娘に味わせたくなはい。私はあの娘にすぐになくなるようなものではなくて、永久にあの娘を窮乏の手の届かぬ所におく様な財産を残してやりたい。いいですか、あの娘には端した金を残すつもりはないのです。一財産残してやるのです。」

こう云つた自分の孫娘を貴婦人にするこの出来る金を賭によって得ようという、この老人の狂つた様な望みこそ、かえつて彼が愛する少女ネルを犠牲にし、彼女を幼くして死なせる原因ともなるのであるが、これは唯一人の老耄の男の妄想と云つた丈で見過されることは出来ない。

「ニコラス・ニッケルビー」のラルフ (Ralph) の父は終世貧しさを

り逃れる事が出来なかったが、偶然叔父の遺産を継承することとなり、僅かばかりの土地を買い入れ、小じんまりとした余世を送り二人の息子ニコラスとラルフにそれぞれ遺産を残して死んで行く。ラルフは弟ニコラスと共に学校へ通い、寝物語に寡婦となつた母親から、父親存命中の貧しさや彼等の父に遺産を残した叔父の豊かな生活の話を聞く。そして弟のニコラスが臆病な静かな性質で、その話から世間を避けて自分の資力の許す範囲内で穏やかな生活しようとする決心をするに反して、ラルフは、この貧乏と富の対比の物語から、富こそ幸福と権力の唯一の源であり、重罪を犯さぬ限りあらゆる手段で金をかきあつめるのは全く正当であると考え、金に勝るものはないと結論する様になる。かくしてラルフは着々と高利貸として成功するが、弟ニコラスの方は妻にそのかされて慣れぬ投機に手を出し、財産を蕩尽する。そして自分はそのショックで妻と息子と娘を残してこの世を去る。この様にして彼の息子ニコラス・ニッケルビーが母と妹とを連れて伯父のラルフを頼り、ロンドンに出て来る所から、「ニコラス・ニッケルビー」の物語は始まる。しかしラルフは貧乏を恐れ、貧乏を憎んでいる男であつた。彼は甥ニコラスの顔にかつては彼が愛した弟の顔を見、そしてニコラスが貧乏に屈せず自尊心を持ち、生一本な寛大な心を持っているのを見、彼の中に自身に、金こそ第一義のものであり、自分はそれを軽蔑すると云い聞かせて圧し殺してしまおうと努めている美德を見つけて、自分の生活態度に重大な挑戦をうけるのを感じる。彼はニコラスを見るたびに、幼かりし日々に兄弟仲良く邪心もなく遊んだなつかしい日々が心によみがえるのを感じ、それと共に現在の自分の荒涼たる生活を恥じる気持が起つて

来る。彼の中には、自分がかつて持っていた善良な能力を自分で全部殺してしまったのだという漠たる意識が生れて来る。そしてニコラスが善良であればある丈、彼はこの様な意識に苛まれ、なおもニコラスに辛くあたらなければ気がすまなくなる。ラルフはフェイギンの様に唯だ単なる守銭奴ではなかった。もし彼の目的とするものが金のみであるならば、彼は投機をやったであろうし又実業に乗り出したであろう。しかしラルフの目的は、貧乏に対する復讐であった。彼は自分の財力に魅せられてやって来る彼の犠牲をその鉄の如き手をつかみ、心行く迄それらの人をさいなんだ上、彼等に金を貸してくれる様に懇願させ、最後に彼等の願いを拒絶して、それらの人が頼る所もなく破滅して行くのを見て楽しむのである。ネルの祖父を素直な形の貧乏の強迫観念の犠牲者とするならば、このラルフは裏返しの形に於ける貧困恐怖症患者というべきであろう。

我々はすでに、ディケンズの中に澱んだ暗い恐怖の淵を見て来たが、この貧乏に対する強迫観念こそ、その暗い影を投げかけるものの主要部分を占めていたと考えても間違いはない様に思われる。この頃のディケンズにとって貧困というものがその様に大きな要素を占めるというのは奇妙なことの様に思えるが、ディケンズにとって貧困というのは唯だ単に経済的悪条件という言葉でおきかえられるものではなく、又生活条件の低下というものでもなかった。それは心を裂く様な傷つけられた自尊心の痛みと、自分の意志ではどうにもならぬ鉄の檻の中に入れられ、内に沸きたぎる意欲を抑えもならず、地団駄を踏みながら自分の目的の齟齬するのを見、親子の愛情をもとすれば破滅させる様な生地獄の形相を呈するものであった。最も貴重なるものは金では買えぬというが、この

様な陳腐な格言を好んで口に出す人こそ、金に困った経験のない人なのである。ディケンズはわずか年数ボンドの事で自分の人生が悲しみに満ちた荒涼たるものにされたことを知っているのである。ディケンズは後年幼時を述懐して、

「私は自分が不十分な食事しか与えられず、それに満されずに街をうろつきまわったことを知っている。私は神の御恵みなくば、自分が容易に小悪漢、小浮浪人となつたであろうことを知っている。」^⑩とか、

「誰にも害をなさなかつたという点以外では、私は小さなカインだつた。」^⑪

と云っている様に、貧困が人間を如何に変えるかを、つぶさに知っていた。貧しさの故に自分が如何に卑劣な行いをするかということをよく知っていた。そして彼が文字通りに神の恵みによってその善良な性質を失う瀬戸際で、無事に解放された故に、自分こそ貧困の悪を説く権利と義務を持っていると感じ取ったのである。人はディケンズの作品を読み、オリヴァーやネルが悪の環境にとりまかれながらも、何一つその生来の美しい性質を失うことの無いのを、そして又サイクス、フェイギン、キイルプ、ラルフ等の悪人が徹頭徹尾何一つ善良な所もなく悪漢であるのを写實的でないとして冷笑するに急である。しかしディケンズにとっては、オリヴァーやネルの姿こそ、又サイクス、キイルプ等の百パーセントの悪人の姿と共に動かすことの出来ない現実であった。貧困の生地獄の餌食となる瀬戸際で逃れたディケンズにとっては、そして又自分が貧困の犠牲者となり、もう少しの所でこれらサイクス等にも劣らぬ

悪人になる可能性のあったことを、否、現在でも情勢一変すれば、なお自分にその可能性のあるという強迫観念にとりつかれてゐるディケンズにとっては、白か黒か二つのものしか存在し得ず、中間的なものは存在する余地がなかった。ディケンズは外面の華やかさにも拘らず、彼の心の中では常に危険な崖道を歩いてゐた。絶壁の下の彼方には、うすぐらいロンドンのもやにつつまれて、サイクス、モンクス、ラッジ等の黒い影が蠢き、忌わしい手を差し伸べて、今にも彼をその闇の中へ引きこもうとしてゐた。その危い道を雄々しく辿つて行くオリヴァーやネルやスマイク (Snike) の姿こそ、サイクス等が亡びの象徴であるのに対して、ディケンズに救いを与えてゐたのであった。それ故にディケンズは、オリヴァーやネルの姿をますます聖なるものとして行く一方に於て、フェイギンその他の夢魔の所産とも云える連中を、物に魅せられたかの様に、恐怖に近い喜びを以て忌わしい姿に画くのであった。「ピクウィック・ペーパーズ」から「バーナビー・ラッジ」に至るディケンズの作品に於ては、そのメロドラマ性が強く指摘される。そして、これがディケンズの欠点であるかの如くに述べられるけれども、ディケンズの心の中に於ては、このメロドラマこそ真実であつた。悪人は飽くまで暗黒の悪人であり、善人は汚されることのない純白の善人である。そして如何に悪人が跳梁しよとも、如何に貧困の魔手が伸びて来ようとも、遂には善は悪を克服し、貧困の暗黒も超越される。これがディケンズの理解した哲学であり、これによつて彼は自分の心的平衡を保つてゐたのであつた。だから「オリヴァー・ツイスト」や「骨董店」の教訓も安価な勸善懲惡といったものとは云えない。それはディケンズが自分の心の

中で、貧困の強迫観念と苦闘したあらわれであつた。そして此の段階では一応ディケンズは彼の心に巢食う闇の力を克服したかの様に見える。しかし、ジョンソンが、

「暗い幻は陽光の映像を決して征服しはしないけれど、あらゆる小説の中に、魔女の銅釜のあがる煙を通して想像された様な光景があり、それらがディケンズの情緒的な力の平衡のどんな僅かな変化も、ディケンズの世界をドストエフスキーの罪と苦悩の世界に変えることが出来るのを予兆してゐる。」^⑩

と云つてゐる様に、ディケンズは「ピクウィック・ペーパーズ」の成功によつて、始めて幸福を取りもどし、そのため数多の読者と共に陽気に笑い、闇の力を押し殺すだけの余裕もあつたが、その心の暗黒の淵は決して克服されたものではなく、何か事があるにつけ、ディケンズに心理的平衡を失なわせる。そして平衡を失つた彼の心の中には、餓えてロンドンの街頭をうろついた小さなカインの姿の自分の記憶が頭を拾げて来る。この思い出にさいなまれる苦しみをまぎらわせるために、彼は色んな刺激を求め、遂には晩年のあの狂った様な活動にも追いやられたのであつた。

「バーナビー・ラッジ」の完結と共にディケンズの文壇生活の第一期とも云うべきものが終結する。「ピクウィック・ペーパーズ」から「バーナビー・ラッジ」に至る作品は殆どそのすべてが、「ピクウィック・ペーパーズ」の突発的成功の直後に執筆を契約されたものであつた。一躍にして人気作家の位置にのし上つたディケンズは四方から流れ込んで来る執筆依頼を如何にとりあつかつていいものか面喰つた様であり、デ

イケンズの沸く様な人気は、彼の作品の市場価値を日を追って上昇させ、何年か前に契約した金額は、その時には正当な額と思われても、いざ執筆の時が来ると非常に僅少なものとなってしまった。ディケンズはこの様な理由から再三書店と契約更正の争いを起しながらも、やっと「バーナビイ・ラッジ」に至って、以前の契約の責を果したのであった。そして今は追われる仕事もなく、アメリカ旅行へと出発して行くのである。

フランス革命によって欧州全土に沸き起った自由の叫びは、英国にも伝わって諸種の改革を生み出した。しかし、フランスとアメリカがその色彩を一挙に新にしたのに反して、英国はその宗教改革の時と同じく妥協的な態度を取った。英国は民主政体を作り出したけれどもその中に貴族制度を保存し、議会を改革したけれども治安判事の手を通じて旧勢力の維持を計った。そしてこの様なあいまいな妥協の下に数多の急進主義者が生れたが、これらの人達は、大西洋の彼方の未だ見ぬ民主国アメリカに理想的国家を見出そうとしたのも無理はない。チェスタートンは此辺の事情を云って、「十九世紀の偉大な急進主義者たちは皆アメリカを途方もなく理想化した。」と云っているが、ディケンズもこれらの急進主義者と類を同じくして、アメリカを理想化して考えていたことは明らかである。所がアメリカに渡ったディケンズを待っていたものは、失望ばかりであった。彼は「マーティン・チャズルウィット」(Martin Chuzzlewit)に於て、アメリカの旗を見て言うマーティンの口を借りてその幻滅を

「チェツ お前は遠くから見れば派手な旗だよ。しかし裏側に光りをあて、お前の向う側を見抜ける程近くへよれば、お前はあわれな

デーヴィッド・コッパフィールドまで

ファステイアンの布にすぎない。」²⁰

と述べる。彼の見たアメリカは、英国から独立して自由進歩の国なりと自称し、古いきずなにながれた英国を蔑視しているが、その動機は英国の優越性を認めざるを得ぬ劣等感の裏がえしであるにすぎない。ディケンズは英国に住み、英国の欠点短所を厭になる程見聞し、それを是正せんと努力し、その努力に何かの靈感を得ようとはるばる大西洋を越えてアメリカに渡ったのであった。しかしそこで彼の見つけたものは、その汚れた英国、不完全な英国を崇拜するアメリカであった。しかもその崇拜は真情から出たものではなく、自己の劣等感をひたかくしに押しかくそうとする所からほの見えるものであっただけに彼は益々嫌悪の情を催すのである。そして遂に彼は、

「これは私の見に来た共和国ではない。これは私の想像の共和国ではない……そして英国、英国でさえも、その古い国が悪い所もあり、又欠点もあるけれども、そして何百万という国民は悲惨であるが、比較に於ては立ち勝る。」²¹

と失望の声を上げる。

こう云った未知の国に法外な理想を抱いて出かける無邪気な旅人が、実際にその国を見て、自分の想像と余りにも異なるのを知り失望するといふことはそれ程珍らしいことではなく、極めて陳腐な出来事ともいえるよう。しかしこの陳腐なことも、破れ易い心的平衡を持った、そしてその神経が針金の様にピンとはり切っていたディケンズの様な人間には、見逃すことの出来ない影響を与えたのである。アメリカに於ける国際著作権の論争や、「アメリカ覚書」(American Notes)によってかもし出

されたアメリカの世論の憤激、こう云つたものと相俟つて、アメリカに對する失望はディケンズの精神的安定をその根柢からゆるがしたものであつたに違いない。それに加えて次々と続いて生れて来る子供、父や弟の経済的乱脉、このような家庭的な煩わしさもディケンズを悩ますべく、この頃に相次いで起つて来た。しかし決定的な打撃は、「マーティン・チャズルウィット」の売行のよくなかつたことによつて与えられた。

「ピクウィック・ペーパーズ」以来、ディケンズの作品は常に莫大な売行を示し、フォースターによれば、「ピクウィック」は四万、「骨董店」は六万、「バーナビー・ラッジ」は七万、それぞれ完結迄毎号売っていたのが、「マーティン・チャズルウィット」に至つて、二万になるかならずの売行をしか見なかつた。^③貧困の強迫観念にとりつかれてゐるディケンズには、この事は晴天の霹靂であつたにちがいない。彼の異常な迄に研ぎ澄まされた神経は直ちにこれに呼応し、ふるえ、彼の前には又ワレーン靴墨工場やマーシャルシーの惨めさが幻の如くに浮んで来る。そして彼は自分の人気のおとろえたときのことを思い煩う。この「マーティン・チャズルウィット」の売行に関して、些細なことから長年の関係あるチャップマン・ホール書店と喧嘩別れをし、「マーティン・チャズルウィット」脱稿後に、自分の想像力がおとろえ人気もうすれたときのためにと日刊新聞の主宰を思い立つ。そしてその主筆に就任するも僅か一週間にしてその席を去り、「クリスマス・カロール」を完成したが、それによる収入の僅かなのに腹を立て剽竊事件を法廷に持ち出して損害賠償を要求する。法廷もディケンズの要求の正しいことを認めるが、被告側は破産の申立をして罰金を逃れ、あらゆる訴訟費用は勝つた方のディケンズに負わされることとなる。こう云つた慌ただしい生活の中にディケンズはいたたまれなくなつてロンドンの世帯をたたんでイタリアへ安静を求めて旅立つのである。

上に述べた様な色々の事件に一貫して現れるものは、いら立つたディケンズの姿であるが、この様に焦慮し傷つけられ易くなつた彼の心の中には、又一時忘れられた様な暗い過去の思い出がその姿をあらわしていた。アメリカに渡つたマーティンは、人に欺されて、障熱の地エデン(Eden)の怪奇な風物にとりかこまれ、熱病にうなされて過去を思い出す。そのエデンは巨人失望の住む暗い土地であり、倒れた木が散在する湿地、大地の善き成長はすべて破滅し、邪惡な醜いもののみが成長する様に思える沼である。そこでは致命的な病が苛むべき人間を求めて、夜にもやの如く、水の上をすべりながら、さながら亡霊の如くマーティンを追い求める。そして又そこでは祝福された太陽でさえも、腐敗と疫病の上に燃える一つの恐怖と変る。こう云つた例の「魔女の銅釜」的寮圍気の中で、ディケンズはマーティンの口を借りて次の如き告白をする。

「おゝ、倦み疲れたる時よ、おゝ、暗い過去を探り求め、惨めなる現在から解脱し得ず、幻の宴や戯れ、威儀を正した虚栄の光景の中を、心労の重い鎖をひきずり、永く忘れ去られた幼時の馴染の場所に、又昨日訪れた所に一瞬の休息のみを探し求めてあらゆる所に恐怖と戦慄のひそむを見出すやつれたる魂よ、おゝ、倦み疲れたる時よ、これらに比すればカインの彷徨も又何であらうか。」^④

イタリアから歸つたディケンズは、再び何物かに追われる如くにスイスへ旅に出かけ、そこで「ドンベイ父子」(Dombey and Son)の筆を

執ることとなった。この頃のディケンズの手紙は、自分の気持の落着かず、「ドンベイ父子」の筆の運びが思った様に行かないことの苦情に満ちている。そしてその原因を彼は、例えばレマン湖の水が静かであるからとか、ロンドンの刺激がないからとか、色々些細なことに見出そうと努めて見はしたもののそれで満足出来る筈はなかった。ディケンズがこの頃どういう事を考えていたかはつきり示す様な直接の証拠は我々には与えられない。唯我々の知り得る事は、若い頃にマリア・ビードネル事件から受けた心の痛手をまぎらわすために新聞記者の仕事に狂った様に打ち込んで行った時と同じく、今自分の創作活動が今迄になかった程に困難なものとなって来た時、彼は自分の絶望的な不安を素人芝居の興奮に押し殺そうと努めていたことが知られる。

この頃にディケンズは、フォースターのふとした話から、自分が押し隠していた幼時の生活の目撃者の自分の身近近くに存在することを知る。そして愕然とすると共に、今は最早自分の胸に秘密を秘め、一人その記憶に悩まされる事の無益を悟るのである。かくしてディケンズは大体この頃に自分の自叙伝の断片を記し、それをフォースターに示すが、未だにそれを公表する決心までは出来なかった。しかし公表こそしなかったにしても、このことはディケンズのこの幼時の出来事に対する態度がこの頃に一変したことを示している。彼はその事に対する今迄の病的とも云える恐怖の態度を一擲して、現在の自分をかくあらしめた過去の解明を試みるのであった。

ディケンズをして今迄の作品を書かshめて来た原動力となったのは、彼の心の中にひそむ闇の力との闘いであった。彼は盗賊のとりことなっ

たオリヴァー、醜怪なる獣の如き悪人達に追われ、遂に静かな村の教会堂に永遠の憩いを発見する迄、此世に一つの安息所も見つけることの出来なかったネルと云った、あらゆる不利な環境にめげず、悪にも染らず健気にその善良さを保つ子供の姿に、幼なかりし日の自分を投影してそれに自己憐憫の涙を注いで来た。しかし幼時の苦しみのディテールの一つ一つまでも想起することは、これは彼の心理的平衡を直ちに破るものであるだけに、彼にとつてはそれはタブーとなっていた。彼は幼時のことを妻にさえ物語らなかったと云われているが、妻のみならず彼は自分自身でもそれを想起することを拒否していた。しかしいくら彼がその思い出を押し殺していた所でその記憶が消え去る筈もなく、それは熱病にうなされた夢魔の様に彼を苛み、彼が創作する間にも彼の頭脳を常にかすめていたにちがいない。そして彼のこの過去の思出に対する態度は恐怖のそれであつて、それが自分の頭の中に、全くチャールズ王の首の如くこびり着いて離れないのは仕方がないとして、自分では出来る丈その詳細を思い出すことは避け、全力をつくして、殆ど、恐怖を以てこれを押し殺そうと努力した。その為に彼の初期の小説に於ては、主人公をとりかこむ悪の力は悪魔的とも云える程のものに画かれ、その悪の力が醜悪であればある程、又その悪の力が強大であればある程、そして可憐な主人公の運命が殆ど危殆に瀕する様に見えれば見える程、悪の力が打ち破られるという結末に於けるカタルシスの効果は大なるものであった。この様な自分をさいなむ暗い思い出の浄化を目指して、ディケンズは善人、悪人それぞれを両極端に迄理想化して行つたのであった。

しかし、昔の自分の事を目撃し、それを記憶している他人が存在する

今となつては、自分を偽ることも無益であつた。ディケンズは恐怖を抱いて自分から偽りのメロドラマ的な自己を作り出し、それに安易な同情の涙を注ぐのも愚かな事であり、今や雄々しく自分を苛む過去の思い出と対決する時期であることを悟つたのであらう。そしてこの様に自己の現実主義的解明をなすに当つては、今迄の如き形態の小説の古い革袋に新しい酒を盛ることは出来ないであつて、この新しい酒を盛るべき新しい革袋の模索の時期が「ドンベイ父子」であつたと思える。当時の彼の手紙を見ると「ドンベイ父子」の製作に彼が苦しんだかということやうかがい知ることが出来るが、この苦勞の間に彼の中には「デーヴィッド・コッパフィールド」から、「エドウィン・ドラッド」(Edwin Drood)に至る新しい發展への醗酵がなされていたのであつた。

果然、出来上つた「ドンベイ父子」に於ては、今迄のディケンズの中のメロドラマ臭は一掃された。その中に於て、フローレンス(Florence)等を苦しめるいわば悪玉にあたる人物すべて、白い歯をむき出すカーカー(Carker)にしても、自尊心の権化ドンベイ氏にしても、そして又ブラウン夫人(Mrs. Brown)の如き端役に至る迄、輕蔑すべき人物であつても、決してラルフ・ニッケルビー、フエイギン、クイルプ、サージョン・チェスター(Sir John Chester)、ジョーナス・チャズルウィット(Jonas Chuzzlewit)等と引つた悪魔的な人物と類を異にする。否、我々は、「ドンベイ父子」に於てはカーカーその他の人物を悪玉と云う名稱で呼ぶことを躊躇するのである。「オリヴァー・ツイスト」や「骨董店」その他に於ては、我々は所謂善玉悪玉の名称を使用して何等ためらうことはないが、この「ドンベイ父子」に於てはそれらの人物は悪玉という名

で指し示すには充分に醜惡でない。そしてこの傾向は「デーヴィッド・コッパフィールド」に於て、更に顕著に見られる。デーヴィッドから大事な母と家庭を奪ひ取つたマードストーンでさえも、デーヴィッドの母と結婚したのは決して財産目当てではなく、彼女を本当に愛していたからであり、彼女の死んだあと何日も悲しみに暮れていたことが述べられている。こう云つたことは、要するに全くの悪人、完全な善人と云つたメロドラマを去つて、世上に存する人間は、善も惡も共に備えたものであるという人間の複雑さの認識への出發であると考えてよい。此の様な新技法を試みると共に、ディケンズはこの「ドンベイ父子」に於て、もう一つ新しい事を試みた。それは、作品中に於ける登場人物の性格の發展であつた。その試みの一つはウォルター・ゲイ(Walter Gay)の性格についてであつた。我々はフォースターを通じて、ディケンズがウォルターを徐々に自然に怠惰へそして不正直へそして又破滅へと墮落させ、彼の中に、我々が毎日の生活によく見る悲惨な墮落の様を画き、如何に善きものが徐々に誘惑と安易な氣持によつて惡に變つて行くかということを示そうと考へたことを知り得る^⑤。しかしこれはフォースターの忠告もあり、又ディケンズ自身の考へもこれを実行するまでには行かず、この考へも取り上げられなかつた。しかしこれに代つて、この計画された變化を成し遂げた人物は、「ドンベイ父子」の中に於て決して重要ではない、ほんの端役をしか占めない人物に於てはあるが、ポール(Paul)の乳母ポリリー(Polly)の息子ロップ(Rob)に見られる。このロップなる少年も最初は決して悪い少年としては登場しなかつた。しかしドンベイ氏の一人よがりな慈善から、慈善学校(Charity school)に入れら

れ、その制服を着て学校に通う間に、街の腕白小僧にいぢめられ、自尊心を傷つけられる日々を送りながら、やがて悪に身染めて行く様になる。このロップは小説の始めに於ては、丁度「骨董店」のキット（~~不吉~~）とよく似通った立場に居る。「骨董店」に於て、キットがネルに憧れの気持を持ちながらも、ネルの祖父の使用人であつて見れば、その望みを口に出すことも出来ず、貧しさにも拘らずネルに忠実であり、誘惑に負けず正直に身を持していたが、このロップはそうではなかった。ポールが富裕の家に生れながらも幸福な幼年時代が送れなかったのに比して、このロップが貧しさの中にも両親の愛を受けて生長する様を画き、ロップを中心としてディケンズ得意の貧困の中の愛を画くこと、そしてそれを愛なき富裕の不幸と対比させることも出来たであらう。しかしそれはディケンズの採る所ではなかった。

この様なことを総合して考えて見る場合、この「ドンベイ父子」に於てなされたディケンズの転回は主要次の如きものであったと云えよう。即ち、これ迄の作品に於ては例えばオリヴァーとフェイギン、ニコラスとラルフ、ネルとキイルプと云った一組のそれぞれ対立する人物の間には何の類似性もなかった。一方は百パーセント善人で、一方は百パーセント悪人であり、それぞれ別の星の下にその様に生れて来たものとされていた。然るにここに於ては、善人と悪人の間の差異は絶対的なものでなく、善人といえども容易に環境の致す所悪人に変化し得るのであり、又悪人には改心の余地は充分にあり、世の中の人間を独断的に白と黒にはっきり二分する必要はなく、どの人間にも善と悪との二つの可能性がひそんでいるのであるという認識が生れて来る。そしてディケンズ

は自分の中にひそむ所のカインとなる可能性も、それは決して病的な恐怖で押し殺すべきものではなく、それも又今の自分の一部なのである。だから今あるままの善悪両方の可能性を持った自分が本当の自分の姿で、それをそのままに受け入れればいいという判断に到達した。

上述したウォルター・ゲイの性格についてのディケンズの考えも、この彼の精神的変化を物語っている様に見える。いささか独断に失するおそれがあるかも知れないが、小説の主人公というものは殆どの場合に於て、作家自身の投影であり、その行動は作家自身の行動である様に思える。成程主人公が自殺すると云った場合、勿論作家自身が自殺してなければならぬということは矛盾する。しかし主人公が自殺してしまった場合、その自殺という外面的行為そのものは作家自身以外の他人の行為のひきうつしてあつても、主人公が自殺するに至る迄の、その自殺という行為の理論づけの部分は、これは皆作家自身の個人的な頭脳の中での解釈であつて、作家自身が、自分でかくかくの条件の下に於て、かくかくの理論づけをした場合には、自分は自殺してもいいという認定を下して始めて主人公は自殺するのである。こういう意味に於て主人公の行動は作家自身の行動とほぼ同一であると考える訳であるが、このディケンズの場合、小説中の人物に今迄自分が病的に恐れていた変化をさせるということは、今迄自分が恐怖を以て眺めていた自分の中の悪への可能性を綿密に観察しなければならないことを意味するのであり、この様なことを考へついたという事実だけでも、ディケンズの心の中に今迄自分を苛んだ暗い影を客観的に距離を置いて眺めようという余裕の生じたことを証明するものである。

この様な転回点に達したディケンズは、次に短篇「馮かれた男」(Haunted Man)に於て、自分の新たな哲学の理論的認識を行う。そしてその実践的認識となつて生れたものが、「デーヴィッド・コッパフィールド」であつた。この「馮かれた男」なる短篇は、「クリスマス・Carol」その他四篇の短篇と共に「クリスマス・ブックス」(Christmas Books)と総称されるものであるが、ディケンズは其中に於て、過去の暗い思出に苦しめられる男がどの様にして、その暗い思出も又今あるがままの自分にとって貴重なものであるかを理解する様になるかという経過を物語っているが、これは殆どディケンズの個人的心境の素直な述懐であると解釈してもいいであろう。さてこの物語はレッドロー(Redlaw)なる一人の有能な化学者についてである。レッドローは幼い時に苦しい生活を味う。そして、母の自らを空しくしての愛や父の忠告が彼を助けたこともなく、唯だ一人、人生に苦闘を続けた男であつた。そして最愛の姉をうしない、一度は恋人に愛されたけれども、余りにも貧しくて彼女を自分につなぎ止めることも出来ず、恋人は彼を見捨て、彼の親友の許に走る。レッドローはその後も苦しい努力を続け、有名な化学者として名をなすが、未だに独身で空ろな部屋に暗い過去の思い出に苛まれる。彼は辛い生活をして来たけれども親切であり、慈悲深かつたが、この自分を苦しめる暗い過去の思い出がなくなれば幸福になるのではないかと考え、そこへあらわれた精霊にその願いをかなえてもらう。しかし辛い思出と共に、悲しみの持つ慰めの力も消えてなくなり、彼が接触するすべての人も又無情冷淡、獸的な人間と變つてしまふ。長年愛し合つた静かな生活をする老夫婦も一夜明ければお互に相手と結婚したことを嘆く様

なことを見たレッドローは苦悩のあまりに、聞き入れられた願いが取り消されることを祈つて、「私が長い間教えて来たことだが、物質的世界に於ては、その驚異的構造の中の一つの段階、一つの原子も、偉大なる宇宙に一つの空白をつくることなしにはとりのけられない。今や私は人間の記憶に於ける善と悪、幸福と悲しみについても同じである事を知る。」と叫ぶ。そしてやがて彼のなした願いも取り消されて、記憶は彼に返し与えられ、彼は自己克服と心の平和の源泉は忘れ去ることでもなく、又心を蝕ばむ様な物思ひにふけることなく、記憶の人を浄化する力にあることを悟つて、「主よ我が記憶を新たならしめ給え。」と祈るのである。以上が「馮かれた男」の筋であり、ディケンズは自分を苦しめる記憶について、この様な理解に達したのであるが、エドガー・ジョンソンはこれを評して、

「ディケンズはこの事を頭(mind)に於ては知っていたが、これを心(heart)に於て自分に信じこませることは出来なかつた。疑いもなく、これがこの物語が感傷的で涙っぽく教訓的にすぎる様に思える理由であらう。……心理的問題の知的把握も、又その解決を意志の力で課する試みも、成功した芸術作品を生み出すことは出来ない。それはその創造者の存在の最奥の資質に於て感じられなければならない。」^⑧

と云つて居るが、この批評は全く当然のものであつて、我々は決してこの段階でディケンズが完全な悟りに達したと思つてはならない。彼がこの短篇に宣明した哲学を或程度自分のものとしたのを見るためには、我々は「デーヴィッド・コッパフィールド」の誕生を待たなければな

らないのである。

ディケンズがフォースターに示した自叙伝の断片に於ては、次の様な個所が見られる。即ち、親類のジェイムズ・ラマーの仲介で、ワールン靴墨工場の職工となることになった所を叙する部分、

「こんな年頃で、私がこれ程容易に世間へほうり出されることが出来たというのは不思議なことだ。私達一家がロンドンにやって来て以来、哀れな小さな下働きに私が下落して後も、誰も私に同情を持ってくれなかったというのは私には不思議に思える。独得の能力を持ち、理解力も早く、気負い立って、繊細で肉体的にも精神的にもすぐ傷つけられる子供の私に、確かに出来た事なのだから、何かを免除させる様に暗示したり、又どこか普通の学校へ行かせてやるだけの同情を持つ人が誰も居なかったというのは、不思議なことだ。私の父も母も完全に満足していた。彼等はもし私が二十歳になつて、グラマー・スクールで名を挙げ、ケンブリッジへ行こうとしていても、この時ほどに満足することはなかったであらう。」

とか、父親とジェイムズ・ラマーとの喧嘩によつて、ディケンズがワールン靴墨工場から解放される様になつたとき、母親がそれに反対して、ディケンズが工場に居残る様に熱心に説いた事を述べて、

「私は怨みを以て或いは憤りを以て書いてはいない。私は如何にこれらの事柄がより集まつて、今の私を作り上げたかを知っているからなのだ。しかし、私の母が、私がもとのところへ送り戻される様に一生懸命になっていたのを、私は以後決して忘れなかったし、又今後もし忘れないであらう。又それどころではなく忘れることは不可

デーヴィッド・コッパフィールドまで

能だらう。」

といった様な部分、この様な部分は、いかにディケンズが自分で、怨みの気持を持って書いていたのではないとか、これらのことのおかげで今の自分が出来上つたのだということを自分でよく知っているとか弁解した所で、何としても怨みの気持のある事は歴然としている。この断片的自叙伝は、大体「ドンベイ父子」着手前に書かれたものらしいが、これは未だにディケンズの転回による悟りの表われたものではなかった。ディケンズが「馮かれた男」に於て認識した哲学は、この様な章句の存することを許さないものである筈である。そしてこの哲学を、一つの芸術作品として具現するためには、この様な傾向を持つ部分は存在してはならなかった。自分の両親にうらみを述べることなく、自分の過した苦しい生活を作品上に再現するために、彼はミコーバー (Micawber) 夫妻なる一組の不滅の人物を作り出したのであった。ミコーバー夫妻はデーヴィッドの苦難に対して直接の責任ある人間ではなく、デーヴィッドと苦勞を共にした人間で、デーヴィッドが或る距離を置いて彼等の弱点をその直接の被害者としてではなく、傍觀者の立場から、寛大な、ほほえましい気持で眺め、これに愛情を感じるのである。自分の暗い過去の直接の責任者とも云える両親をこの様に画くことが出来る迄に、今ではディケンズもワールン靴墨工場の思出より解脱することが出来たのだ。しかしディケンズが、これで自分の心の中の暗い澱んだ淵を解消出来たという訳ではない。我々が「デーヴィッド・コッパフィールド」という小説の名を聞くと、最初に頭に上つて来るのは、その前半の部分である。マードストーン・グリーンビー商会より逃れて、ベトシイ・トロツ

トウッドに庇護せられ、ペゴッティ (Peggotty) 少女エミリー (Little Emily)、ディック氏 (Mr. Dick) ステイアフォース (Steerforth) と相知り、やがて司法見習生になる迄の部分は、いつも我々に甘美な幼年時代の思出にひたらせるのである。しかしその後半、ドラとの恋、彼女との結婚生活、ユライアー・ヒープの陰謀と話が進んで行くとき、我々は前半の天来の妙音ともいふべきものが何処かに消えて行った様に感じる。このことはとりもなおさず、ディッケンズの創作態度の弛緩に原因している様に思える。

これより前に、ディッケンズが問題の断片自叙伝を書いたとき、フォースターを通じて知り得る所ではそれはマリア・ビードネルとの恋愛事件にまでは進んで居なかった。ディッケンズは、この断片に於てワレン靴墨工場での生活を書くことは出来ても、この恋愛事件に手を染めることは出来なかった。それと同様に、「デーヴィッド・コッパーフイールド」に於ても、マードストン・グリーンビイのことに關しては、ディッケンズはフィクションを効果的に用いながらも、真実を完全に把握していたのに対して、デーヴィッドとドラの恋愛に關しては、作者ディッケンズがその素材であるマリア・ビードネルとの恋愛の屈辱を冷静に観照する余裕が未だ持てなかったために、その恋愛は完全な夢物語となった。この恋愛は全く架空の發展をなし、その結末もディッケンズの想像の中の現実に根を下したものではなかった。デーヴィッドがドラと仲を割かれて絶望する丁度その時、正しく天来の助けか、スペンロウ氏が死ぬ。そしてお伽話にも出て来ない様な非現実的なお人好しの二人のオールド・ミスの叔母の出現によってドラは目出度くデーヴィッドと結ばれる。こう云った

筋の運びを安易と云わずしては、他に評する言葉に苦しむのである。そしてディッケンズは結末をどの様に持って行くか考えあぐんだ揚句の様に、ユライアー・ヒープの陰謀を持ち出して来る。しかしこのエピソードも全く無用のものであり、ベトシイ・トロットウッドの夫である人物が登場するなどとは全く真実性に乏しいといえよう。ギッシングは、このヒープの陰謀を評して、

「ウィッカム氏 (Mr. Wickham) をとりまく謎、ユライアー・ヒープの悪事というものは、我々に到底信じられるものではない。それは唯筋のもつれが必要な様に思われるという丈で、いい加減に導入された筋のもつれである。」^⑧

と云っているが、これこそ正に至言と云わなければなるまい。要するにディッケンズはワレン靴墨工場に關する過去の解明には成功したが、マリア・ビードネル事件に關しては、成功しなかったのであって、自分の対決しなければならぬものを避けたが為に、その創作態度は安易なものとなって、「デーヴィッド・コッパーフイールド」の後半は前半に比して力の落ちるのを感じさせる原因となったのである。

しかし、ディッケンズは、この「デーヴィッド・コッパーフイールド」を通じて、相当程度の自己解明に成功した。そして、この様に正直に自己と対決したというのは非常に価値のあることであって、彼が今迄求めていた心の平和というものを或程度獲得することも出来たのである。

① John Forster: The Life of Charles Dickens, (Everyman's Library) vol. i, p. 33.

② Edgar Johnson: Charles Dickens, His Tragedy and Triumph (Simon

- and Schuster, N. Y. 1952) vol. i, Part one, Chap. 5.
- ③ G. K. Chesterton; Charles Dickens (Kenkyusha, Tokyo) p. 24.
 - ④ Forster; op. cit. p. 22.
 - ⑤ Johnson; op. cit. Part one, Chap. 3.
 - ⑥ Forster; op. cit. p. 16.
 - ⑦ *ibid.*
 - ⑧ Chesterton; op. cit. p. 28~29.
 - ⑨ Forster; op. cit. p. 21.
 - ⑩ Johnson; op. cit. p. 46.
 - ⑪ *ibid.*
 - ⑫ George Gissing; Charles Dickens, A Critical Study (Blackie & Son) p. 16.
 - ⑬ Johnson; op. cit. p. 163.
 - ⑭ *ibid.* p. 174~5.
 - ⑮ *ibid.* p. 164.
 - ⑯ Old Curiosity Shop; Chap. 3.
 - ⑰ Forster; op. cit. p. 25.
 - ⑱ *ibid.* p. 23.
 - ⑲ Chesterton; op. cit. p. 164.
 - ⑳ Martin Chuzzlewit; Chap. 21.
 - ㉑ Johnson; op. cit. p. 404.
 - ㉒ Forster; op. cit. p. 285.
 - ㉓ Martin Chuzzlewit; Chap. 25.
 - ㉔ Forster; op. cit. p. 21.
 - ㉕ Johnson; op. cit. p. 659.
 - ㉖ Forster; op. cit. p. 21.
 - ㉗ *ibid.* p. 32.
 - ㉘ Johnson; op. cit. p. 45, note
 - ㉙ Forster; op. cit. p. 33.
 - ㉚ Gissing; op. cit. p. 49.